

文字遊びの今昔
—鈍字とギャル文字を隔てるもの—

小野恭靖

Ono Mitsuyasu

Mobile Society Review 未来心理 [13号] 掲載

2008年9月25日発行

文字遊びの今昔

―鈍字とギャル文字を隔てるもの―

ギャル文字登場の必然

ギャル文字と呼ばれる文字がある。その名のとおり若い女性^{II}ギャルが表記に使う文字である。この文字がインターネットやメールの世界に登場し、マスコミに取り上げられて話題になったのは二〇〇二^〇〇三年頃のことであった。ギャル文字はまた、へた文字とも呼ばれる。この文字に縁のない大方^{おおかた}の人々のために簡単に説明すれば、本来の日本語の平仮名・カタカナ・漢字を元に、あえて類似する形状の文字を用いて醜化^{みにく}したり、まったく別の文字や記号を合成して、意図的に類似する形状で表記する文字をいう。

例えばカタカナ「ア」を漢字「了」によって表記したり、平仮名「た」を漢字「十」と平仮名「こ」を組み合わせて表記したりする文字遊びである。漢字も同様で「木」と「ム」を組み合わせて「私」と読ませたりする。これらの作業によって成立する文字の形状は、本来の文字に類似するとはいえ、ぎこちない形であるため、前掲のように、へた文字とも呼ばれるわけである。

当然のことながら、このギャル文字の出現には賛否両論があった。容易に予想できるように「日本語を乱す悪しき用字である」と眉をひそめる識者が出た一方、本気かどうかは不明だが「平安朝の平仮名発明以来の快挙」などと誉めそやす向きもあった。

「それではお前はギャル文字をどう思うのか」と問われれば、一言「文字遊びとして興味深い」と答える以外にない。正直なところ日本語を乱す害のある文字とも思えないし、仮に一步譲って正しい日本語(そんなものがあるはずもないが…)にとって有害な文字だと認めても、それが果たしてこの先いつまで残っていくかを考えれば、それほど目くじらを立てて非難するほどのことでもないであろう。また一方で、ギャル文字の登場を平仮名発明以来の快挙とするのも過大評価以外の何物でもない。理由は至って簡単。不特定多数の日本人が互いにコミュニケーションを図るときに必要なとされるような文字ではないからであ



ギャル文字

小野恭靖 Ono Misuyasu

る。何せ通行の日本語表記である仮名や漢字に依拠して、その類型を演出しているに過ぎないのであるから。

塩屋喜兵衛の瓦版

ギャル文字を遙かに遡ること百数十年。文字遊びの優れた先例があった。鈍字と呼ばれる文字遊びがそれである。時は江戸時代末期の文政・天保年間（一八一八〜四四）。場所は大阪心斎橋博労町の書肆兼草紙屋（出版社兼書店）塩屋喜兵衛店。その塩屋から発信された文字遊びが鈍字である。当時、塩屋喜兵衛は多種の一枚摺り瓦版の企画・制作をおこなっていた。塩屋の発行した瓦版は縦一六センチメートル、横二三センチメートルあまりで、今日のB5判の紙をひとまわり小さくしたコンパクトサイズで統一されていた。そして、それらの多くは見立て番付と称される相撲の番付の形式を借りたランキングの摺り物であった。ランキングの具体的な内容はといえば、日本語のことば遊びを中心としたウィットに富んだ作品がその過半を占めていたのである。今日的にいえば「知のモバイル」とでも称すべき知的でポータブルな代物だったことになる。

塩屋の瓦版のことば遊びについて簡単に紹介しておこう。

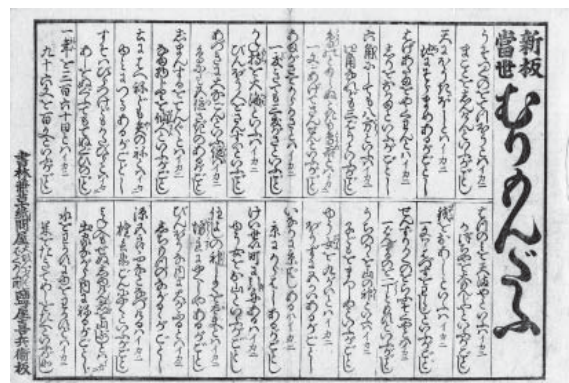
瓦版のことば遊び

塩屋喜兵衛が発行したことば遊びの瓦版は多岐にわたる。以下に、筆者が直接目にしたごく一部の代表的な瓦版を、その内容によって、しゃれ・口合・無理問答・判じ物・など・文字遊び・その他の七種に分類すると、次のごとくとなる。なお、作者が明記されている瓦版については、（ ）内にその作者名を掲出した。

- ① 「しゃれ」……「鳥づくししゃれ文」（繁丸）、「魚づくししゃれ文」（繁丸）
- ② 「口合」……「大新板国づくし絵口合」、「役者づくし口合文句」
- ③ 「無理問答」……「神道仏道むりもんだふ」（今井黍丸）、「さけさかなむりもんだふ」
- ④ 「判じ物」……「大日本六十四州絵考」、「大坂町づくし絵かんがへ」
- ⑤ 「なぞ」……「新板なぞづくし」、「なぞなぞ智恵の海」



瓦版『大しんばんどん字づくし』



瓦版『新板当世むりもんだふ』

⑥ 「文字遊び」…「小野篁嘘字尽」(式亭三馬)、「大しんぼんどん字づくし」、「どん字づくし 二編」、

「当世風流文字くどき通人ことば」

⑦ 「その他」…「重言見立大相撲」、「餅でないもちづくし見立角力」(今井黍丸)

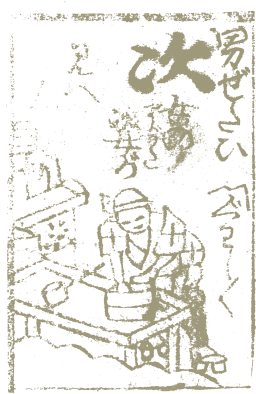
嘘字と文字くどき通人ことば

これらのうち、⑥「文字遊び」には大きく分類して嘘字・鈍字・風流文字くどき通人ことばの三種が収録されている。嘘字は小野篁(たかむら)の名前が冠されて古くから伝わる歌字を元に、式亭三馬が創作した戯作である。「椿」「榎」「楸」「柞」をもとに、人偏に「春」「夏」「秋」「冬」を旁として置いて実際には存在しない漢字を創作し、「うわき」「げんき」「ふさぎ」「いんき」などと読ませる文字遊びである。

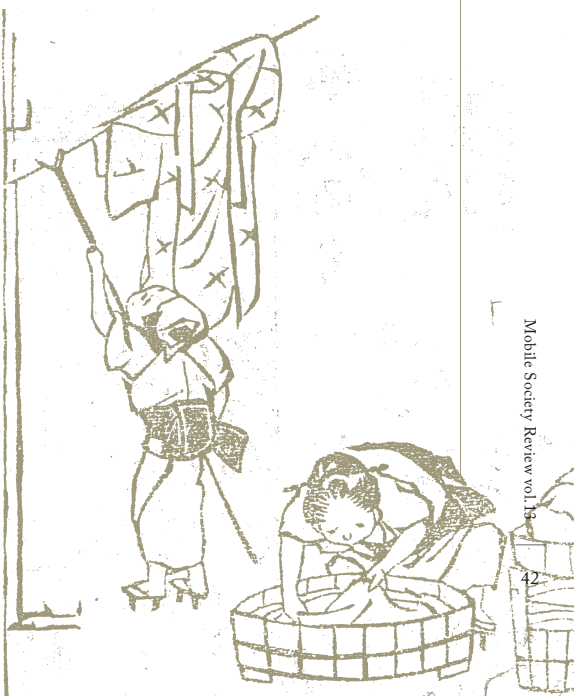
風流文字くどき通人ことばとは、文字を分解して暗号のように表現した遊びである。例えば、「いちしのとうはち」で「あホ(阿呆)」を、「とうはちぼうばねくよこのちよん」で「ホレタ(惚れた)」を表す。解説するまでもないが、前者は「いちしのすなわち」「し」の「の」を合成して「あ」の形とし、「とう」||「十」と「はち」||「八」を合成して「ホ」の形とする。すなわち「あホ」である。「とうはちぼうばねくよこのちよん」も同様に、「とうはち」で「ホ」、「ぼうばね」で「レ」、「く」で「ク」、さらにそこに「よこのちよん」で横向きの棒を加えて「タ」とし、「ホレタ」となる。この文字遊びは分解した文字の形状を列挙して問いとし、それを合成して答えるものである。筆者の子ども時代にも「いちくちそいち、いちのめは(一口ソ、一ノ目ハ)」と問いかけて、「頭」と答えさせる遊びがあった。これは今日のギャル文字と、その発想を一にしているといえる。ギャル文字にも江戸時代の末期という遙かな昔に先祖が存在していたのである。

鈍字の大ブーム

塩屋の瓦版から発して、その当時の大ブームとなった文字遊びが鈍字である。鈍字とは、実際の文字(ほとんどが漢字で占められる)そのもの、もしくは実際に存在する文字の一部を細工変更して、その字の形状から頓知的な読みを導き出す趣向の文字遊びである。例えば、「次」という漢字を「つき」「じ」などという通常の読みでは読ませず、「おとこぜたい(男世帯)」と読ませる。何故なら「姿」という別



見んぐく
麻
鬼の
来ぬ
魔



の漢字を元にすると、そこから「女」がない漢字が「次」だからである。鈍字の解説はあくまでも頓知的な書き方で「女の姿が見えない」からとしている。同様に「麻」を「せんたく（洗濯）」と読ませている。「麻」は「鬼」のいぬ「魔」であるからと解説されている。「鬼のいぬ間（魔）の洗濯」という諺の駄洒落によっていることにお気づきだろう。また、通常は部首の間構え^{けいごま}としてのみ用い、単独の漢字としては用いない「冂」という形状の文字を「留す（留守）」と読ませる。「内に人がいない」からである。またこんな例もある。「手」の右半分を消して左半分だけにした鈍字である。読みは「いそがしい（忙しい）」、「手」が足りないからだそうである。

右に紹介した鈍字は塩屋発行の瓦版で人氣に火がつき、その後一大ブームとなって『どんじしう 初編』『鈍字集 初篇』以下数冊の単行の冊子が刊行されるに至った。大坂から発した鈍字は江戸や尾張にも広がり、尾張では子どもたちが遊びの中でおこなう一種のクイズとして広まっていたことが確認されている。いわば江戸時代の文字遊びの頂点に立ったのがこの鈍字であった。

ギャル文字と鈍字の間

筆者はギャル文字や、空気が読めないことを「KY」と表現するようないわゆるKY式日本語を批判しようとは思わない。むしろ面白がる部類の人間である。そのような悠然とした寛容な態度は、それらの日本語がこの先長く流行しないことを予見しているからではないかと指摘されることもしばしばある。しかしそれも少し違う。もちろん自ら積極的に使おうとは思わないが、それでもそれらについて、日本語の様々な側面や可能性を知らせてくれる興味深い風潮だと本心から喜んでいたのである。

ことばは時代とともに変化する。その中で、様々なことば遊びが繰り返し興った。それはある個人の発見による自己表現から発したものではあったが、次第に周囲の人々の知的な共感を得て、その時代のブームとなっていた。考えてみればことばはコミュニケーションの手段であるから、ブームとなり得たことば遊びは、それさえも同時代の世代を超えたコミュニケーションのひとつに他ならなかったのである。

果たしてギャル文字が同時代の世代を超えたコミュニケーションの媒介となることのできるのか注目を続けていきたいと思うばかりである。

なお、江戸時代の文字遊びについては、小著『ことば遊びの文学史』『ことば遊びの世界』（ともに新典社）の中で詳細に述べた。是非ともご参照いただきたい。

小野恭靖（おの みつやす）

大阪教育大学教育学部教授

大阪教育大学学長補佐

1958年、静岡県生まれ。日本歌謡史を核とした日本古典学を専攻する傍ら、日本語のことば遊び研究にも従事している。

著書に『ことば遊びの文学史』『ことば遊びの世界』（新典社）、『中世歌謡の文学的研究』『近世歌謡の諸相と環境』（笠間書院）、『歌謡文学を学ぶ人のために』『子ども歌を学ぶ人のために』（世界思想社）、『絵の語る歌謡史』（和泉書院）など。

プロフィールは発行当時のものです。